

日本語の係助詞「は」および主格の格助詞「が」の働き のグラフによる視覚化

A visualizing the function of Japanese particle topic marker 'wa'
and subject marker 'ga' by using graphs

岡安 一壽

Kazuhiisa OKAYASU

神奈川県立湘南高等学校

Kanagawa Prefectural Shonan High School

Abstract: I. It is possible to visualize the function of Japanese particle topic marker 'wa' and subject marker 'ga' by using graphs. These graphs help us understand the role of 'wa' and 'ga'. And they show the difference between Exhaustive listing and Neutral description.

II. People or computers can gather information as 2-dimensional arrays by hearing many sentences of the type 'A wa B ga C'. By using the arrays, they can say the sentences of the type 'A wa B ga C', and can give the information to the others.

1. 普遍的な様子を表すための「は」と非普遍的な様子を表すための「が」の働き

説明の都合上「aはA」「aがA」という形の文のaを主部、Aを述部と呼ぶことにする。

1. 1 主部が1つしかないものの場合（主部が固有名詞等の場合）

● (いつでも) a —○— A
または

(どこでも) a —○— A

という関係を伝えるためには「aはA」と言う。

例. (毎日) 太陽—○—東から昇る
という関係を伝えたいければ、「太陽」と「東から昇る」を「は」でつないで、

太陽は東から昇る (1-1)

と言えば良い。

図1-1は、文(1-1)で伝えたい内容をグラフで視覚化したものである。縦軸は伝えたいか否かを表すものとする。

【太陽は東から昇る】

太陽—東から昇る

という関係

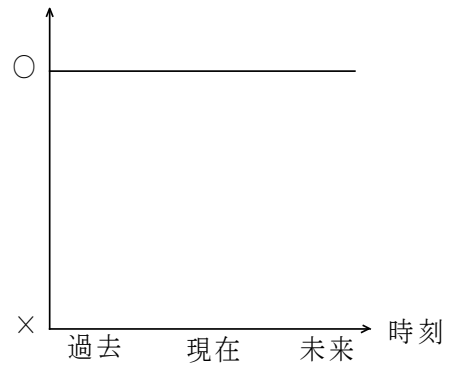


図1-1

● いつでも成り立つわけではないのだが、
または、どこでも成り立つわけではないのだが
(その時の) a —○— A

または、

(そこでは) a —○— A

という関係を伝えるためには、「aがA」と言う。

例. (今まで) 太陽—×—東から昇る

(今) 太陽—○—東から昇る

という関係を伝えるためには、「太陽」と「東から昇る」を「が」でつないで、

(おい,) 太陽が東から昇る (ぞ!) (1-2)

と云えば良い。図1-2は、文(1-2)で伝えたい内容をグラフで視覚化したものである。

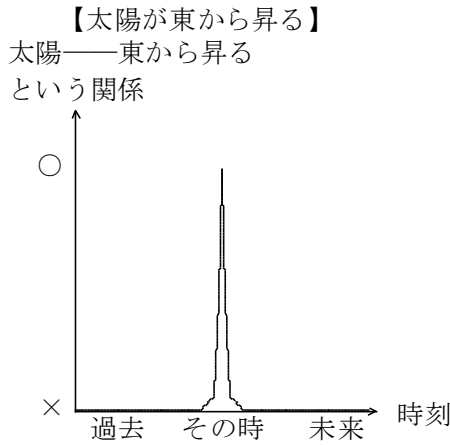


図1-2

1.2 主部がいくつかあるものの場合 (主部が普通名詞等の場合)

● (どのaでも) a——○——A
 という関係を伝えるためには「aはA」と言う。
 例. (どのクジラでも) クジラ——○——大きい
 という関係を伝えなければ、「クジラ」と「大きい」を「は」でつないで、

クジラは大きい (1-3)

と云えば良い。

文(1-3)は、1頭のクジラについて時間的な恒常性を述べているのではなく、総称としてのクジラの普遍性を述べている。しかし、話し手にとっては、過去にクジラを見た時も、これからクジラを見る時も成り立つことを示しているのと同じである。

【クジラは大きい】
 クジラ——大きい
 という関係

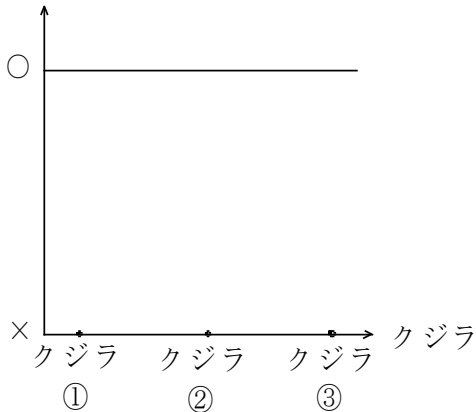


図1-3

図1-3は文(1-3)で伝えたい内容をグラフで視覚化

したものである。

● どのaでも成り立つとは限らないのだが

(その) a——○——A

という関係を伝えるためには、「aがA」と言う。

例. 初めての海外旅行でアメリカへ行った人が、注文したハンバーガーの大きさに驚いて

(今まで見てきた)ハンバーガー——×——大きい

(目の前の)ハンバーガー——○——大きい

という関係を伝えなければ、「ハンバーガー」と「大きい」を「が」でつないで、

ハンバーガーが大きい (1-4)

と云えば良い。

文(1-4)は目の前のハンバーガーの特殊性、総称としてのハンバーガーの非普遍性を表しており、中立叙述と呼ばれる。

図1-4は文(1-4)で伝えたい内容をグラフで視覚化したものである。

【ハンバーガーが大きい】

ハンバーガー——大きい

という関係

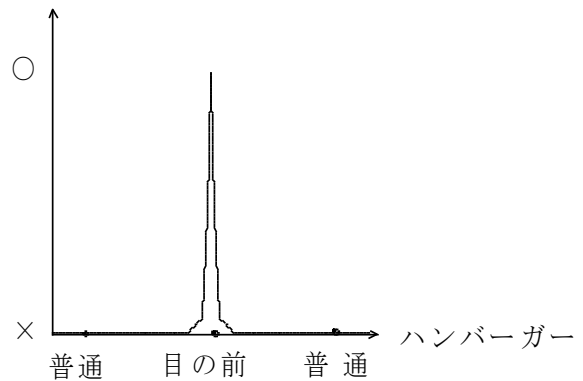


図1-4

2. 総記の「が」と中立叙述の「が」

初めてアメリカへ行った人が、青い郵便ポストに驚いて、

郵便ポストが青い (2-1)

と言ったとする。この場合の「が」は中立叙述の「が」であり、目の前の「郵便ポスト」の特殊性を表している。この意味をグラフで視覚化したものが

図2-1である。

それに対して、「アメリカについて答えて下さい。

{タクシー, 郵便ポスト, ナショナルチームのユニフォーム}の中で青いものはどれですか。」という質問に対して

タクシー ——×—— 青い

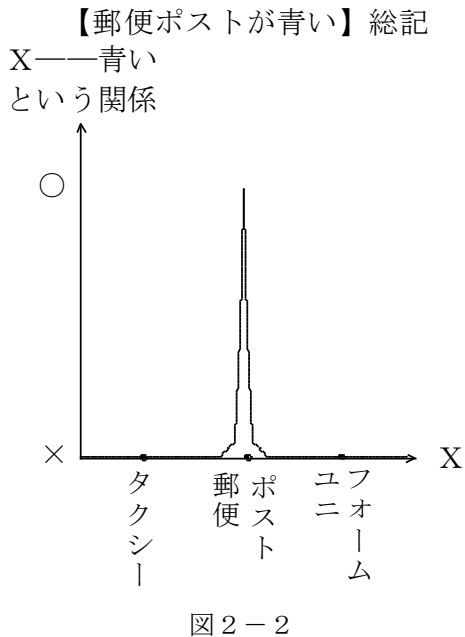
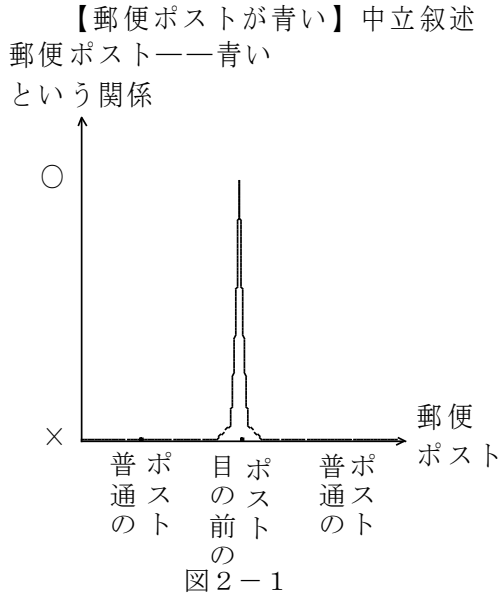
郵便ポスト ——○—— 青い

ユニフォーム ——×—— 青い

という内容を伝えようとして

郵便ポストが青い (2-2)

と答えた場合の「が」は総記の「が」と呼ばれる。
 この意味をグラフで視覚化したものが図2-1である。
 横軸は主部を含むグループである。



3. 連体修飾節に含まれる中立叙述の

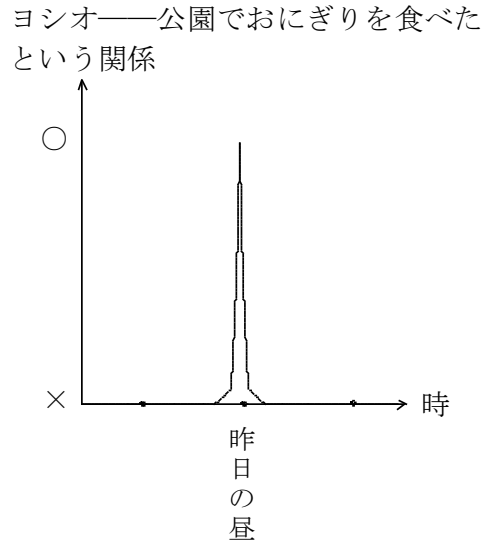
「が」

ヨシオ—昨日の昼に公園でおにぎりを食べた
 という関係があったとする。

すると、「昨日の昼」を表すものとして
 「ヨシオが公園でおにぎりを食べた時」

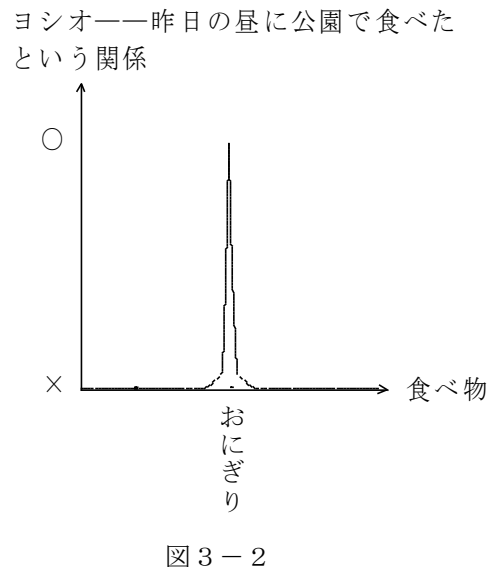
とすることができる。これは
 ヨシオ—○—公園でおにぎりを食べた
 という関係が成り立つ時という意味であり、

ヨシオが公園でおにぎりを食べた (3-1)
 の部分は中立叙述である。
 意味をグラフで表すと図3-1のようになる。



また、「おにぎり」を表すものとして
 「ヨシオが昨日の昼に公園で食べた食べ物」
 とすることができる。これは
 ヨシオ—○—昨日の昼に公園で食べた
 という関係が成り立つような食べ物という意味であり、

ヨシオが昨日の昼に公園で食べた (3-2)
 の部分も中立叙述である。
 意味をグラフで表すと図3-2のようになる。



また、「公園」を表すものとして
 「ヨシオが昨日の昼におにぎりを食べた場所」
 と言うことができる。これは
 ヨシオ—○—昨日の昼におにぎりを食べた
 という関係が成り立つような場所という意味であり、
 ヨシオが昨日の昼におにぎりを食べた (3-3)
 の部分も中立叙述である。
 意味をグラフで表すと図3-3のようになる。

ヨシオ—昨日の昼におにぎりを食べた
 という関係

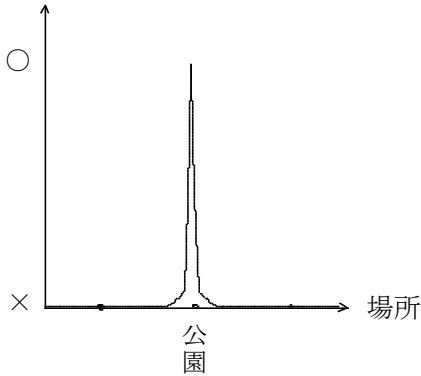


図3-3

こうして、連体修飾節中の中立叙述の「が」の働きをグラフで見ると、被修飾語の表す集合が横軸になっており、それは述部の構成要素である。当たり前前の話になってしまうが、主部を含む集合以外の集合の中で比較をしているのが中立叙述だということが判る。

大野晋(1978)によれば、歴史的に見ると、「が」が現在の働きを持つに至ったのは、「自分が建てた家」「お玉が生まれた時」のように、「が」の上の体言と下の体言とを統合し一体化すること、つまり、連体修飾節の中での働きに始まる。そして、大野は、それこそが「が」の基本的性質であるとしている。

4. 述語節に含まれる総記の「が」と中立叙述の「が」

大人が、子供に「象って首長い?」と尋ねられた時に、

首—×—長い
 鼻—○—長い

という内容を伝えようとして

象は鼻が長い (4-1)

と答えとする。この文の「鼻が長い」の部分は総記であり、意味をグラフで表すと図4-1のようになる。

それに対して、

大人が、子供に「象って、どんな動物?」と尋ねられた時に、

(普通の動物) 鼻—×—長い

(象) 鼻—○—長い

という内容、つまり、鼻というものは長いとは限らないが象については長いということを伝えようとして

象は鼻が長い (4-2)

と答えとする。この文の「鼻が長い」の部分は中立叙述であり、意味をグラフで表すと図4-2のようになり、横軸は動物の集合である。一般的に、

「～は～が～」という型の文の述語節が中立叙述である場合、意味をグラフで表すならば横軸は「は」の前の部分を含む集合になる。

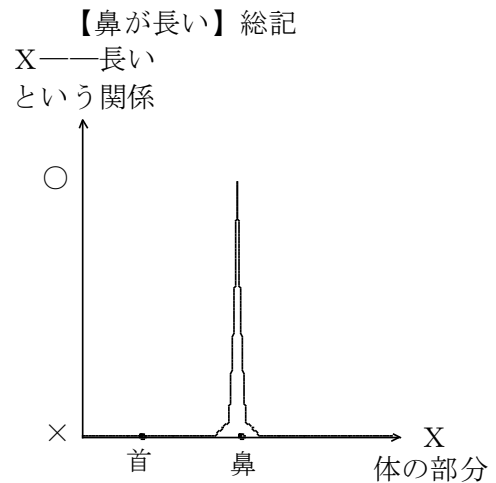


図4-1

【鼻が長い】中立叙述

鼻—長い
 という関係

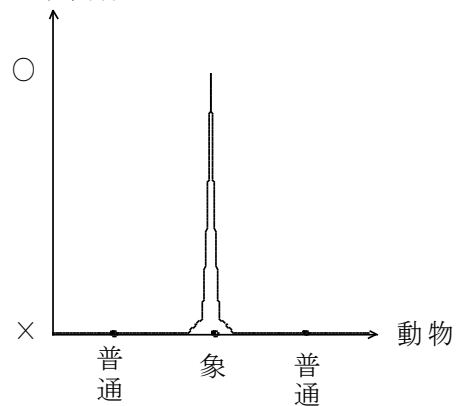


図4-2

人間またはコンピューターが

「象は鼻が長い」

「キリンは首が長い」

「アライイは舌が長い」
 といった文を聞いたり読んだりする度に、
 カウントをしたとする。これらの文は動物名と体の
 部位に関する情報なので、長いものの集合は表1の
 ような2次元の配列としてまとめられる。表1の数
 値は聞いたり読んだりした回数の相対値で10が縦
 の列の最大になるようにしたものであると考えても
 らいたい。聞いたり読んだりする回数を「長い」と
 いうイメージの強さに対応させるのは乱暴であるが
 1つのモデルであると了解してもらいたい。

長い	手	首	足	鼻	舌
キリン	0	10	7	0	1
象	0	0	2	10	0
ペンギン	10	0	0	5	0
クマ	0	0	10	0	0
アライイ	0	0	0	3	5
カメレオン	0	0	0	0	10

表1

総記の意味の(4-1)は表1の「象」の横の行で比較を
 行っている。

それに対して中立叙述の意味の(4-2)は鼻の縦の列
 で比較を行っている。

その比較に基づいて、人またはコンピューターは
 他者に「～は～が～」という型の文で情報を伝える
 ことができる。

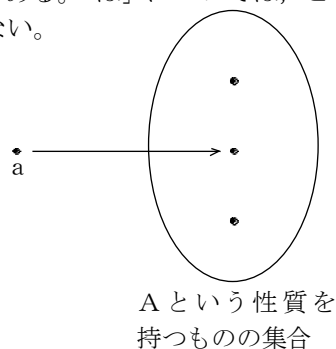
5. おわりに

「は」「が」でマークされるにしてもされないに
 しても、主部と述部の関係の大きな特徴は、主部と
 述部の性質を持つものの集合の要素の1つが対応され
 るということである。つまり、 $a \text{ --- } A$ という関係は

$a \in \{A \text{ という性質を持つものの集合}\}$

であり、3者に共通である。「は」については、この
 関係を示す働きしかない。

ところが、
 「が」が、
 ある集合の中で
 $a \text{ --- } A$ という
 関係が特殊である
 ことを示す働きを
 持つため、「は」は
 役割分担として
 普遍性を示したり



対比のニュアンスを示したりするのだと考えられる。

ニュアンスの違い程度でしかないかも知れないが、
 このような「は」と「が」の働きの違いを認識して
 いることは、コンピューターに日本語を聞き取らせ
 たり話させたりする上で重要なだけでなく、情報を
 収集・蓄積する上でも有効だと考えられる。

参考文献

- [1] 久野暉：『日本文法研究』, pp.27-47, 大修館書店 (1973)
- [2] 大野晋：『日本語の文法を考える』, pp.36-38, pp.145-178, 岩波書店 (1978)
- [3] 庵功雄, 高梨信乃, 中西久実子, 山田敏弘：『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』, pp.259-268, スリーエーネットワーク (2000)
- [4] 上林洋二：「IV.5.A 主題と主格(はとがの表現)」, 『日本語百科大事典』, 大修館書店 (1988).
- [5] 井上和子, 寺村秀夫：『日本文法小事典』, pp.151-163, 大修館書店 (1989)
- [6] 久保美織：JAPANESE SYNTACTIC STRUCTURES AND THEIR CONSTRUCTIONAL MEANINGS, pp.10-41, ひつじ書房 (1994)
- [7] <http://www.k3.dion.ne.jp/~okayasu>